2024年4月 21 日 久宝教会 復活節第 4 主日礼拝メッセージ

「歩みよる神。かつても今もこれからも」　　牛田匡牧師

聖書　ヨハネによる福音書　21章15−25節

先週はすっかり暖かくなり、道行く人々の服装も急に変わったような一週間でした。17 日の深夜には四国地方で初めて震度 6 を記録する地震がありましたし、世界では戦争が続けられている中東の情勢がますます悪化してきているように思います。この先、世界はどうなっていくのだろうか。戦争や、国家間の対立は拡大して行ってしまうのだろうか。また地球環境や自然災害はどうなっていくのか、など考え出しても分からないことばかりです。そのように先の見えない時代の中にありながも、私たちは今「希望は絶望には終わらない」（ロマ 5:5）、「死の後には死を越える命、死からの引き起こしがある」ということを心に留める「復活節」の中を歩んでいます。今日も聖書が私たちに何を伝えているのかを、共に聞いてみたいと思います。

今回の聖書のお話しは「ヨハネによる福音書」の巻末、一番最後の 21 章から、復活されたイエス様とその弟子のペトロのお話でした。21 章の 1 節から 14 節によると、弟子たちは前の晩からガリラヤ湖（＝ティベリアス湖）で漁をしていましたが、魚はちっとも捕れませんでした。しかし、そこに復活のイエス様が現れてからは一転して大漁になった。それから岸に上がって、皆はイエス様と一緒にパンと魚の朝食をとったというお話からの続きでした。

15 節では、イエス様はペトロに「あなたはこの人たち以上に私を愛しているか」と尋ねられますが、「この人たち」とは、ペトロの他にその食事の場に一緒にいた仲間の弟子たちのことでしょう。それにしても、「他の人たちが愛する以上に、あなたは私を愛するか」などと質問したのは、何故でしょうか。皆の前でわざわざ優劣をつける必要があったのでしょうか。しかし、この質問文は「この人たちが私を愛する以上に、あなたは私を愛しているか」ではなく、「あなたは、この人たちを愛する以上に、私を愛しているか」と翻訳することも可能です。そして、その方がイエス様の質問した意図に合致するのではないでしょうか。そのようなイエス様の質問

に対して、ペトロは「はい、主よ、私があなたを愛していることは、あなたがご存じです」と答えました。しかし、続く 16 節、17 節でも、イエス様は同じ質問をされました。その後 17 節ではペトロは 3 回も「『私を愛しているか』と言われたので、悲しくなった」とあります。確かに、現代の私たちの感覚からしても、こんなに同じ質問を 3 回も繰り返されたら、自分の返答がよっぽど信用されていなかったのかと悲しく感じるのではないかと思います。ペトロもそうだったのでしょうか。

ここで同じ質問が「3 回繰り返されている」ということから、「確かイエス様が逮捕されて十字架に架けられる前に、ペトロが 3 回イエス様を『知らない』と言ったというお話があった」（ヨハネ 18 章）ということを思い出される方もいらっしゃるかと思います。イエス様の一番弟子を自負していたであろうペトロは、「たとえ殺されることになっても、イエス様の行く所に自分もついて行きます」（ヨハネ 13:37）と公言していました。それにも拘わらず、実際にはイエス様が逮捕されて連れて行かれた時、周りの人たちから「あなたもあの人の仲間の一人じゃないか」と声を掛けられると、「あんな人は知らない」と 3 回もイエス様のことを否定してしまいました（18 章）。平時には「あなたのためなら命をも惜しみません」と言っていたのに、とっさの時には「そんな人は知らない」と言ってしまう……。そのような人間の弱さをペトロは代表しているのではないかと思います。

ですから今、死から引き起こされ、再び一緒に食事をしたイエス様から、3 回に亘って「あなたは私を愛しているか」と問われたペトロが「悲しくなった」のは、「はい、愛しています」という自分の返答が、イエス様に信用してもらえていないということに悲しくなったのではなく、むしろ自分自身がかつてイエス様を 3 回も「知らない」「自分とは無関係だ」と言ってしまったことを思い出して、悲しくなったのかもしれません。

もう一つ、この箇所で気になるのは、イエス様とペトロの間で交わされているやりとり、問答の中で用いられている言葉が違っているという点です。聖書協会共同訳でも新共同訳でも、「愛しているか」「愛しています」という日本語に翻訳されていますが、元々のギリシャ語では、イエス様は「アガペーしているか」と問いかけ、

それに対してペトロは「はい、フィリアしています」と答えています。現代の日本語では「愛する」や、「大好き」「好き」という言葉が、あまり区別なく使われているように思いますが、当時のギリシャ語でも「アガペー」と「フィリア」は特に区別なく使われていたようです。

ですが、言葉自体は異なっていますから、日本語の翻訳としても、「私を愛しているか」「はい、ほれこんでいます」と訳したり、「私を大切にしているか」「はい、気にかけています」と訳したりしている聖書もあります。そして面白いのは、ペトロに対するイエス様の質問が、始めの 2 回は「アガペーしているか」なのに、3 回目はペトロと同じく「フィリアしているか」に変化していることです。「アガペー」と「フィリア」のどちらが、「内容的により優れているか、劣っているか」ということではなく、一貫して「フィリアしています」としか答えられないペトロに対して、イエス様の方から「そうかい、あなたはフィリアしているんだね」と歩み寄って来られて、そのままのペトロを認め、受け入れてくれたように、読めるのではないかと思います。

そして、イエス様は最後に言われました。「私に従いなさい」、私の後に付いて来なさい（21：19）……。イエス様が「神の子」として普通の人にはない超能力を使って、あちこちで奇跡を起こしていたのであれば、「私に従いなさい。付いて来なさい。同じようにしなさい」と言われても、同じ超能力を授けてもらわない限りは、私たちには「無理です」としか言えません。しかし、イエス様はそうではありませんでした。その始めから最後まで徹底して人間でした。弱く小さくされた一人の人として、神の意志を生き抜き、歩み通し、それ故に十字架刑の死から引き起こされ、「神の子」とされました。それは、言い換えるならば、私たちもまたイエス様の後に従って生きて行くことができるということです。

今日の「招きの詞」は、「見よ、私は戸口に立って扉を叩いている」（黙示録 3：20）というものでした。イエス様は今も扉の外に立ち、私たちの名前を呼び、「会いに来たよ、開けておくれ」と言われています。そして私たちには、そのように歩みよって来られたイエス様の声を聴き、扉を開けることが任せられています。「もし誰かが、私の声を聞いて扉を開くならば、私は中に入って、その人と共に食事をし、

彼もまた私と共に食事をするであろう」と言われている通り、私たちが扉を開けたら、イエス様は喜んで私たちの中に入って来て下さり、共に食事をして下さり、親しく交わってくださると言われています。

「イエス様を愛したい、大切にしたい」と思いながらも、自分だけの力ではそれができないペトロに対して、イエス様は自ら歩み寄り「アガペーでなくても、フィリアでいいから、あなたはそのままで、私について来なさい」と告げられました。神様は、私たちにできないことは求められていません。隣の人たちを大切にしたいと思いながら、最も身近にいる同居の家族に対してすらも、大切にすることができないことの多い私たちです。私たちがそんな弱さや限界を抱えているということも、神様は全て分かった上で、それでも神様の方から、かつても今もこれからも、いつでも私たちの方に歩みよって下さり、そして「私に従いなさい。私の後について来なさい」と言われています。

「大切にしたいけれど、大切にできない。その方法が分からない」と嘆くのではなく、「大切にしたい」という思いが与えられているということ、そしてまた神様の方からいつでも歩みよってくださっているという所から、今日も私たちは、イエス様の後に従う道へと押し出され、歩み出して行きます。